

『細胞が自分を食べる オートファジーの謎』

水島 昇 / 著

PHP サイエンス・ワールド新書

新書版 216 頁 2011 年 12 月発行 定価 (本体 800 円+税)

本書は、今や世界的に最重要キーワードの一つとなり、様々な生命現象に関与する「オートファジー」について、一般人から専門家まで、全ての読者層に極めて興味深くアピールする卓越した入門書である。

筆者自らあとがきにも記すように、初めてのオートファジーに関する一般書という立場から、専門的知識の有無に関わらず容易に理解可能な内容にしつつ、かつ、最先端の研究成果を含めレベルも正確性も犠牲にしない、という、まさに二律背反ともいえる難題をきれいにクリアしている。最先端の研究成果を理解するためには、当然、生物学の基礎から始まり専門分野における過去の研究成果の経時的な理解が前提となるが、本書はその長い道のりを継ぎ目無しに明解に解説することに成功している。そのため、今まで生物学をきちんと習ったことの無い人ですら、すんなりと最後まで読めてしまい、その時にはもうオートファジーという不思議かつ枢要な生命現象の虜になっている。

一般に、物事理解にはヒステリシス（経路・履歴依存性）が強く、どのような道筋で理解していくかによって最終的な理解度や興味が全く変わってくる。悪い場合ではしばしば理解にすら至らないことも多い。小中学校で特定の科目の先生の教え方がつまらなくて、その教科が苦手になってしまった人も多いのではないか。その意味で、本書は間違いなく最高の履歴を読者にもたらすであろう。筆者も記しているように、子供たちがサイエンスに興味を示しうるかどうかの責任の大部分は我々研究者自身にあり、筆者はその重責を見事に果たしていると言える。

個人的には、学会等で筆者のインパクトある研究成果をリアルタイムに驚愕の想いで聴いてきたが、本書を読んで改めてその全貌と、筆者が一番思い入れのあった部分（「体が震える瞬間」）がどこか、その時の考え方や今後の展望などが、非常に良く理解でき、息もつかずに読み切ってしまった。オートファジーに興味のある人にもない人にも、是非ご一読を強くお勧めする。それにしても、筆者は同時に Cell 誌 11 月号にオートファジーの full review（本書にもたびたび登場する東京都医学総合研究所の小松雅明博士との共著）も発表しており、まさに八面六臂の活躍で、本当に「オートファジー」のような人だ。

反町洋之（財団法人東京都医学総合研究所 生体分子先端研究分野 分野長、カルパインプロジェクト プロジェクトリーダー・参事研究員）